**福士　勝衛 （ふくし・かつえい）**

**１、プロフィール**

劇作家。演出家。青森美術会会員。日本大学美術科在学中築地小劇場で演劇活動に参加。健康を害して帰青。戦後劇団「新興舞台」を再建、主宰。「地方演劇」創刊。

＜生没＞

1916（大正５）年８月29日 ～ 1980（昭和55）年１月10日

＜代表作＞

戯曲「鞅々の風」「メレオン島の悲劇」「おンじかすたち」、

創作「肉刺」「尻青き豚」『福士勝衛選集』

＜青森との関わり＞

軍人であった父の任地宇都宮市で生まれたが、小学六年の頃一家をあげて青森に帰郷。葛西善蔵を愛読、母の読書好きの影響も受ける。

**２、作家解説**

福士勝衛は大正５年８月29日、宇都宮市塙田450番地で福士武之助、フミの長男として生まれた。福士家は青森県黒石藩士で平内を所領としていた家柄であったが、武之助は当時陸軍大尉、第14師団歩兵第66連隊中隊長として勤務していた。フミは弘前市鷹匠町の出身。２人の姉がおり、待望の男子誕生ということで大切に育てられた。勝衛は姉達の中でおとなしい少年であった。大正５年４月父の転勤で栃木県女子師範附属小学校に入学、その後新潟県高崎市立南小学校に転校、野球好きの小学４年生になっていた。昭和２年４月、軍縮により退役となり、祖父以来の居住地である青森市浦町字奥野に一家を挙げて帰郷。勝衛は青森県立女子師範学校附属小学校６年に転校する。４年４月県立青森中学校に入学、１年と２年の間に身長が30センチも伸び家族を驚かせた。母の読書好きに影響されて文学に傾倒、とくに葛西善蔵の作品を愛読した。９年拓殖大学ロシア語科に入学、ラグビー選手として活躍。小説「黄壁の戯画」（30枚）ほかを書く。10年、日本大学芸術科に入学、演劇科に在籍、築地小劇場での演劇活動に参加。「化石の森」「キュリー夫人」などに出演。青森では第一次新興舞台公演「国境の夜」に出演、傍ら小説や戯曲の執筆を始める。日中戦争で弾圧が激化し、新劇運動壊滅状態のさなか戯曲「ベーベルさま或る滑走路」「底流」などを書く。16年健康を害して帰青。その後の人生の大半を闘病生活に費す。21年小康の時が訪れ、「新興舞台」を再建、「メレオン島の悲劇」一幕（50枚）を市内蓮華寺、造船所、黒石劇場などで演出公演、22年新興舞台団員の野呂リツと結婚。ラジオドラマの分野でも活躍、24年「新興舞台」解散、病気悪化、青森美術会に入会。33年志摩三平らと「地方演劇」を創刊、伏石克平のペンネームで「人生方程式－あるムイシュキンの挿話－」を発表。昭和55年１月10日久栗坂国立病院で肺結核にて死去。享年65。没後『福士勝衛選集』が同刊行委員会から発行された。

**３、資料紹介**

〇『福士勝衛選集』

図書

1983（昭和58）年２月28日

185ｍｍ×128ｍｍ

病苦の人生をエネルギッシュに生き抜いた福士勝衛の代表作が収められている。「肉刺（まめ）」を含む４篇の創作、戯曲「鞅々の風」ほか合わせて３篇と年譜。選集刊行委員会８名（代表福士リツ）。妻リツと長女真知子、青森美術会の相馬清が一文を寄せている。

〇「マキシム、ゴーリキー誕生八十五周年記念 どん底 ４幕」

プログラム

1954（昭和29）年９月11日

173ｍｍ×185ｍｍ

新興舞台での「どん底」初演は昭和21年であったが、これは青森市教員組合、芝居愛好会、市役所演 劇部の後援により、劇団新興舞台第11回発表会として県立図書館ホールで公演された。福士勝衛は病い悪化、時代考証として参加している。